



Title	幕末における兵書の絵入本化と松亭金水：『絵本孫子童観抄』の編集手法と出版形態
Author(s)	李, 俊甫
Citation	語文. 2026, 126, p. 55-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106104
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

幕末における兵書の絵入本化と松亭金水

——『絵本孫子童観抄』の編集手法と出版形態——

李 俊 甫

はじめに

中国の兵書『孫子』は奈良時代に日本へ伝来したが、その読者は長らく一部の知識人や武家に限られており、広く一般の人々まで読み解く書物ではなかった。近世に入り、荻生徂徠の『孫子国字解』などにおいて平易な言葉で注釈が施され、大きな反響を呼んだ。しかし、挿絵を交えながら、より幅広い層の読者に向けて兵学の知恵を普及させようとする試みは、幕末の慶応元年に出版された『絵本孫子童観抄』(以下、『絵本孫子』と略す)の登場を待たなければならない。

従来こうした流れは、近世日本において『孫子』がどのように受け入れられたかという点から論じられてきた。^①中でも、『絵本孫子』は、数ある注釈書の中で、娯楽性を帯びる読み物としての珍しさを指摘されている。^②しかし、こうした評価は主に作品の表現上の特徴の指摘にとどまり、それがどのような背景で作られ、

当時の制作者がどのような意図を込めたのかについての言及はされていない。さらに、絵入本という形式が、兵学思想の一般読者への受容にどのような影響を与えたのかについても明らかではない。

本稿では、『絵本孫子童観抄』の本文構成・挿絵・出版形態を具体的に検討し、松亭金水の編集手法に着目することで、同書出版背景と近世後期絵入本における位置付けを明らかにする。あわせて、兵学の受容における絵入本の役割についても考えたい。

一、『絵本孫子童観抄』とその編集方針

『絵本孫子』は作者松亭金水(寛政九年―文久二年)没後の慶応元年に、大坂と江戸の四板元によって出版され、大本十四冊三巻の『孫子』注釈書である。書名は寛永年間に出版された林羅山編故事要言集『童観抄』を意識したものと思われるが、想定された「童」は必ずしも実際の児童のみを指すものではなく、兵学

の専門教育を受けていない一般読者層を含む広い意味での初学者を指すと考えられる。

本作では、『孫子』の本文に片仮名で読みを付し、さらに平仮名漢字混じり文で平易な注釈が付けられている。注釈で挙げられた事例に合わせて、各巻に複数の挿絵が入れられ、視覚的な表現も意識した。

巻末には、山城屋佐兵衛の蔵版目録が掲載されている。漢詩を中心とする漢籍が多く並んでいるが、本書はそれらと並んで、当時新出資料として流行った『古文孫子』を含む他の『孫子』関連書物と同一の枠内に掲げられている。

本書が出版された経緯について、序文の冒頭に、

兵之有^二孫子^一、猶^三儒之有^二六經^一也。人不^{サレハ}レ学則已[、]苟^レ学[、]兵^ヲ舍^テ此書^ヲ、何^ニ適^{カシ}哉[、]世之兵家者流、徒知^テ四^ノ摺甲挿旗之法[、]蒙士之所^{ナルヲ}、^{サレ}宜^ニ先学^フ、而至^テ其行軍屯營之法、奇正变化之術^ニ、不^レ肯^セ輕許^シ者何耶。〔中略〕乃知兵之大体、亦在^二幼時学^ニ之^ヲ而已矣。松亭中村先生者、奇傑之士也。居常慨然病^ミ幼学之無^レ漸[、]以為孫子註解、雖^レ不^ト下^二数十家^一、其便^{ナル}蒙士^ニ者蓋鮮矣。於^テ是^ニ專以^二国字^ヲ一解釈^シ、加^{ルニ}以^テ古名将英士之事績^ヲ。雖^レ未^ト至^二集^{ルニ}衆說之大成^ヲ、然^{レトモ}使^{シテ}一^ニ見^セ一^ニ則兵家之大体渙然氷積、其有^レ功^ニ於幼童^ニ果幾何也。〔後略〕

と書かれており、『孫子』を学ぶことの重要性を説いている。兵学において『孫子』が必読書であると強調する一方で、当時の武家が軍陣の作法のみを知り、軍略の奥義を学ぼうとしないことを批判し、幼少期からの学習の必要性を説く。

それを踏まえ、序文に続いて書かれた凡例では、本書の編集方針について特に次の二点を強調する。

まず、先行の注釈書が漢文や片仮名で書かれ、初学者には難解であったことから、「国字^{こくじ}」すなわち平仮名を用いた注釈の必要性を説いている。これにより、「僅^{わずか}伊呂波文字^{いはろはもじ}を習^{なま}へる児童等^{じどうらう}」でも自然と理解しやすくなり、将来の学習の助けにもなると述べている。

また、兵法応用の具体例として、古来の戦例を多数挙げている。これは単に文字の理解だけでなく、兵学の具体的なイメージを持たせるためであり、「偏^{ひとへ}に稚^こきもの^{をいふ}」のために絵図も添えられている。

このような幅広い読者層を配慮した編集方針は、具体的にどのような本文の注釈に反映されているのだろうか。たとえば『絵本孫子』と江戸時代に最も読まれ、影響が大きかったとされる荻生徂徠の『孫子国字解』（寛延三年）について、冒頭の「始計」篇（または「計」篇）の篇名に対する注釈を比較する。

『孫子国字解』始計第一
始ハハシメナリ。計ハハカリコトナリ。ハカリコトヲ始メト

スト読ムナリ。文字ノ意ヲ知ラヌモノハ、カリコト、云ヘバ、ハヤ人ヲタハカリイツハルコト心得ルハ僻事ナリ。兵ハ詭道ナレハ、人ヲタハカルモ計ノ内ノ一ツナルヘケレトモ、計ノ字ノ意ハ、モノヲツモリハカリ目算ヲスルコトナリ。此始計ノ篇ハ、総シテ軍ヲセント思ハ、マツ敵ト味方ヲハカリクラヘテ、軍ニ勝ツヘキカ勝マシキカト云コトヲ、トクト目算シテ見テ、果シテ勝ヘキ図ヲキハメテ軍ヲスヘキコトヲ云ヘリ。孫子一部ハ専ラ合戦ノ道ヲ説テ治国平天下ノ道ヲハ説カス。カヤウニ前方ニツモリハカルコトハ合戦ノ本ナリ。前方ニ目算ヲセス了簡ヲ究メスシテ合戦ニ勝ツト云コトハナキワケナルユヘ、此篇ヲ孫子ノ開卷第一義トスルナリ。第一トハ次第ノ一ト云フ意ニテ、孫子十三篇ノ最初ナレハカク云ヘリ。此篇ヲ集注本ニハ計篇ト云。始ノ字ナシ。

『絵本孫子童観抄』計篇第一
計は物を算へ計るの詞。因てこれを始とす。まづ軍を出さんと欲する時は。敵味方の分を量り。或は兵糧器械の入用を。計り定めずはあるべからず。因てこの篇を一とす

両者とも「計」という語に注目し、その意味及びこの章の重要性を説明しているが、徂徠の注釈は、原文の一字一句に細かく注釈を加えているのに対し、金水の注釈は原文の大意を汲み取り、平易な言葉で説明することに重点を置いている。

また、徂徠は「始計」篇の内容を、敵と味方の戦力を比べ、勝算を立てることだと詳しく説明しているのに対し、金水の注釈は敵味方の分だけでなく、兵糧や武器の準備にも言及しながら、より簡潔な注釈を加えている。

先行する徂徠の注釈を汲んだ部分も多いと思われるが、『絵本孫子』の注釈は、原文の言葉の細部よりも全体の大意を平易に説明することに重点を置いており、これは初学者向けの入門書という性格に由来するものと考えられる。

『絵本孫子』のもう一つの特徴は、一方的な本文の解説にとどまらず、所々に読者を強く意識した作者の補足を字下げで入れている点である。

たとえば、卷四「形」篇の「善守者蔵^ニ於九地之下^一。善攻者動^ニ於九天之上^一。故能自保而全胜也」という一節がある。金水はまず基本的な注を付けた後、さらに一字下げで「附ていふ〔中略〕天は積氣なりといへども、地を裹むこと九重なり。故にこれを九天ともいふ」と書き、いわゆる九重天の名称や広さについて詳しく紹介する。そして最後に、以下のように述べている。

本文にいふ九天は。強右に挙たる九重天のことにはあるべからず。されど其因みあるにより。こゝに此天の名とその周囲の広大なるを。掲け出して童蒙に示すものは。所謂作者が老婆心なるものなり

金水は、本文の「九天」が直接前に紹介した九重天を指すわけではないが、それに関連する豆知識として九重天の名称や広大さを取り上げ、童蒙に示したのは、作者の「老婆心」によると説明している。

また、巻八「九変」篇の解説の最後で、金水は「一書」の説を引用した後、次のように述べている。

さて、しやうこの章の註解に於て、しやう諸家種々の説あれとも、いぢじやう一定せず。しやう強て説とも童蒙の。解し安きこと能はざれば、いぢじやうこの俚にて止ぬべし。

ここでは、「九変」篇の解釈について諸説ある中で、「童蒙」には難解なものが多いため、これ以上の詳しい説明は控えるとしている。

このように、金水は常に読者である「童蒙」を意識し、彼らの理解力に応じて注釈の内容や分量を調整しようとしている。この姿勢は、先行する注釈書とは一線を画すものである。

二、『絵本孫子童観抄』の挿絵

『絵本孫子』の挿絵は、兵法応用の具体例を視覚的に示すだけでなく、読者に興味を持たせる役割も有する。【附表一】に示したように、挿絵には基本的に日本歴代武將の逸話や有名な合戦が描かれるが、日本の歴史と合戦とほとんど無関係な一部の例外が目

立つ。合計五十九枚のうち、奇談的な説話や中国故事に関するものはそれぞれ三図ある。これらの例外には、本書の挿絵の選択方針が反映されていると考える。

奇談的な説話について、たとえば、巻五「勢」篇では、「三軍ノシウベキシム、カナラズウケテキヲナカラハイセフ、キセイコレナリ之衆、可レ使下、必、受レ敵而無上レ敗者、奇正是也」の一節を解説する時に、挿絵には狐憑きという奇談的な話が描かれている（図1）。

里に人々を悩ます狐憑きがいた際、修験道の人が般若心経を誦して退治しようとするが、狐憑きは般若心経を逆さに誦して自らが経に詳しいことを示した。人々が困っていたところ、一人



図1 巻五「民家の狐魅 儒家の頓才」挿絵



図2 巻六「浅草田圃妖怪の昔語」挿絵

の儒者が現れ、狐に論語の中の「子曰」の出現回数を問うたところ、狐は答えられずに去っていったというものである。

金水は、ここで般若心経を「正兵」、儒書を「奇兵」になぞらえた。つまり、狐退治の際に用いられた般若心経という正攻法だけでは効果がなかったが、儒者の知恵という奇襲によって窮地を脱したという解釈である。一見すると『孫子』の兵法とは関係のない奇談のようであるが、金水はこれを巧みに『孫子』の「奇正」の理論に結びつけている。

もう一例として、巻六「虚実」篇では、浅草田圃の妖怪譚を挿絵として選択した。影にあたる「虚」ではなく本体にあたる「実」を見抜くことの重要性を説く(図2)。ここでも、奇談的な話の挿絵を通じ読者に興味を持たせ、抽象的な兵学概念を具体化している点が確認できる。

国立国会図書館に所蔵される金水の自筆稿本『松亭反故囊』(請求記号…寄別6-4-1-2)には、挿絵に関する指示を書いた張り紙が確認できる。次の引用は、その一例である。

登蓮坊な蓑笠を着て、雨中にわたのへ野が許へゆく。路地の体、樹立、山水等、画者の意に従ふ。蓋遠見に茅屋の見ゆるさまなど可然歟。このわたのへとゆへるは何れの地にや、定かならずといへど、いつれ辺鄙なることは必せり。その心にて御染筆可下候。

登場人物の姿や場面の大まかな構成要素、すなわち「蓑笠を着て雨中を行く」「辺鄙な土地であること」といった要点のみが示されており、具体的な構図や細部については「画者の意に従ふ」として、絵師に委ねられている。金水は挿絵制作に際して、細部まで指示しているわけではないが、内容上必要な要素を指定している。

したがって、『絵本孫子』の挿絵選択にも金水の意味がある程度反映されていると思われ、凡例に掲げられた事例の選択方針は挿絵の選択にも影響している。

○これに引用する古戦物語。多く本朝の戦ひを引く。その餘義なきに至りては。唐土を引用する所もあれど。彼処と此処とはその趣。一谷ならざる所あり。且法令人情も。いさ、かながところ。還て応せざる事も多し。元来本朝の児童等に。観せんと欲し物するなれば。本朝の事こそ善れと。古書に就て掲げ出せり

○本文の趣きにより。古戦に限らずいと野鄙なる。物語さへ載たるは。たゞ因まんと欲するまでにて。只管註釈に拘はらねばなり

傍線部によると、本書は基本は日本の合戦を用い、適例がない場合に限って中国故事を採ること、また本文理解に資するのであれば「野鄙なる物語」も用いたことが示されている。挿絵は一貫

して、読者の理解を優先して選ばれていたと言える。

三、松亭金水と大本型絵入本の出版

『絵本孫子』の様式上の最も大きな特徴の一つは、大本の形態で出版された点である。本節では、書型の観点から、『絵本孫子』が成立した背景を、松亭金水の創作活動と当時の絵入本出版との関係から検討する。

松亭金水は為永春水作品の筆耕を経て、自らも戯作に携わった、筆耕出身の戯作者である。さわめて多作な金水は、自身の創作のみならず、書肆の注文に応じた副作も数多く手がけ、さらに古典を絵本として編み直した作品も多数残している。その作品群は、個人としての特色が明確に表れていない。注文に応じて作品を量産した作家であるとの評価もあって、個別の随筆や人情本に關しての言及があるものの、絵入本作品については従来本格的な研究対象とはされてこなかった。だが裏を返せば、金水の絵入本には、当時の書肆が求めた企画意図や読者の期待が如実に反映されている。

金水の戯作の師である為永春水の場合、『一休禪師教訓図会』『三字経絵抄』『絵本漢楚軍談』など教育的な作品が複数確認できるが、その多くは中本型もしくは半紙本型であり、本作のような大本型の作品はほとんど見られない。しかしその一方、人情本と艶本を除いた金水の作品を概観すると(【附表二】、副作を含めて五十六タイトルが確認でき、そのうち中本三十二種、半紙本十二

種、大本九種、横本三種ある。中本が主流であるが、嘉永以降に本書のような大本や一回り小さい半紙本の割合が増加し、金水作品の主要な位置を占めるようになる。

近世出版において書型は内容ジャンルと密接に結びついていた。高木元が指摘したように、半紙本型の読本は、本のサイズが一回り小さい草双紙や人情本と比べて、格の高い作品と位置づけられていた。金水が半紙本や大本型の作品を手がけたことも、彼の器用さが次第に書肆から評価されるようになった結果だと思われる。実際、本作と同じ大本の作品には、随筆やその稿本を除けば、嘉永四年『頼光朝臣勲功図会』、安政四年『日本百将伝一夕話』、安政五年『日蓮上人一代図会』と刊年不明の『善悪因果経和談図会』がある。これらに共通する特徴は、既存の難解な書物を挿絵入りで通俗化して解説する企画であるという点である。

たとえば、『日蓮上人一代図会』は江戸の日蓮宗寺院松栄山大法寺による寺院板であるが、その序文では、仏教の教義を孫子の兵法に例え、「猶_下孫吳之応_レ変用_{ルカ}」^{ルカ}「奇正_上」^上と述べている。その上で、従来の日蓮上人の伝記を「童蒙」のために挿絵を加え、和文で分かりやすく解説すると本書の構成方法を説明した。また、『善悪因果経和談図会』の序文も同様に「幼童婦女子にもはやくことわりをさとしめん」ためだと、本書の出版目的は難解な経典を分かりやすく解説するためだと述べる。⁷⁾

これらは通俗仏書としても分類されるが、一般向けに作られた挿絵入りの解説書という観点から、『絵本孫子』ときわめて強い類

似性を有している。

『日本百将伝一夕話』は林羅山著『本朝百将伝』に基づく作品である。嘉永七年に書かれた金水の序文によると、羅山作は「簡易而不_レ能_レ無_レ遺憾_二」であり、「浪華書肆群玉堂」すなわち河内屋茂兵衛に請われ、羅山の本文を引き、「国字」をもつて注釈する。その上、「窃加_二新説画図_一」して、出版させた。

兵書の通俗注釈である『絵本孫子』とは一見無縁であるが、本作品に描かれた人物を『絵本孫子』の挿絵と比較すると、源頼義、源義朝、楠正成、楠正行、細川頼之、豊臣秀吉、武田信玄、北條早雲、足利尊氏など両方に見られる武将が挙げられる。嘉永七年に同じ板元から忠臣蔵四十七義士を扱った『赤穂義士傳一夕話』も出版され、一種の定型化された企画だと思われる。

『善悪因果経和談図会』と『日本百将伝一夕話』は、『絵本孫子』と同じく、いずれも元となった本文の横に片仮名による訓読みを付し、その下に解説を二行に分けて注するという、共通した版面構成をとっている。さらに、内容の理解を助けるため、経文の主題に対応した具体的な事例の挿絵が配置されている点も共通している。経文の内容を直接なぞるのではなく、周知の説話を借りて本文の思想を視覚的・物語的に示す点に、これらの作品の編集上の共通する特徴と言えよう。

金水に依頼されたこれら一連の大本の企画は、難解な典籍を挿絵と和文注釈によって通俗化しつつ、大本という書型のもとに再構成することで流通させる、当時の書肆において繰り返し用いら

れた定型的な出版形式であったと考えられる。兵書の通俗注釈である『絵本孫子』もまた、その大本という形態に照らしてみれば、こうした定型的な出版形式の一例に位置づけられるものであり、その成立は必ずしも特異なものではなく、当時広く用いられた出版形式の一例とみることができる。

四、松亭金水作絵入本における抄録・翻案の方法

書型や版面など様式的面だけではなく、『絵本孫子』に見られる難解な先行作品に挿絵を配し、分かりやすく解説する方法も他の金水作や先行作品によく見られる常套的なものである。⁽⁸⁾

たとえば、『頼光朝臣勲功図会』は「図会もの」と呼ばれる後期読本の一種であり、上方で作られた名所図会に倣い、特定の先行作品に取材して物語を構成させた小説である。その前身に当たる『源氏一統志』⁽¹⁾の凡例には、『絵本孫子』と非常に近い内容が書かれている。

このしよ、ぜんたいへいきほんてうつうききだいびかうてしりやくとつ
此書は前太平記本朝通記歴代備考国史略等の諸書を参考
して、多く誤謬を訂し、且年歴異同あるをば、その所に辨じ
たれど、卑陋の臆見また過ちなき事あたはず。(中略) 本書
往々その緯の似たる所へは、和漢の古史を引用して辨じたる
処、屢ありといへども、この書は元来大部を縮て簡易なら
しめんことを旨とすれば、夫等は省て載ざるなり。且宣旨
牒状の類或ひは公卿致仕の表等多くは、其事実のみを挙て

其文章をば漏したり。頗る遺憾に似たりといへども、そは文辞の巧拙を味^{あじ}ふが為^{ため}にして、幼童婦女子に解易^{げしやす}からず。因て今于茲省^{いまこゝにはお}けり。看官必ずしも怪給ふことなかれ

横山邦治が指摘したように、「文章そのものは、幼童婦女子に判り易くするという配慮によるのか、『前太平記』に見られるやや詰屈な漢文調は姿をひそめており、いかほどかその面影を残しながらも、冗長さの勝った読み易い文章となっている」「その態度・方法は、上方の絵本もの読本作者や高井蘭山などという一部の江戸の絵本ものの作者の態度・方法と全く一致しているといえた」のである。

このような方法は半紙本・大本だけではなく、金水が製作した合巻にも共通している。たとえば、天保七年から弘化二年にかけて刊行された『絵本平家物語』という作品が挙げられる。本作は中本五編十冊の構成をとっており、その出版意図については、巻末広告から確認することができる。

絵本平家物語 松亭金水訳 歌川国直画

これは世に伝ふ平家物語を草ぎうしにつゞり、子供衆にもよみ安く、わかり安きをむねとして、第七へんにてよみ切二出板仕候

古典である『平家物語』を草双紙化することで、「子供衆にもよみ

安く、わかり安き」形で提供することが明確に意図されている。本作もまた、古典作品理解の前提となる知識の多くない読者層を想定し、内容の平易化と理解のしやすさを重視して編集された作品であることがわかる。基本的に原作の物語を草双紙の形式に合わせて平易に書き換えたものである。『平家物語』や『源平盛衰記』の本文をほぼそのまま引用している箇所も見られるが、全体として「子供衆」という読者層に配慮した構成をとっている。

それまでの草双紙には、『平家物語』を題材とした作品が複数確認できる。たとえば、黒本の『清盛一代記』や、天明三年刊の黄表紙『頼朝一代記』などが挙げられる。平家物語は長期にわたって安定した人気を持つ題材であったため、『絵本平家物語』もまた、書肆にとって需要が見込める、比較的低リスクの低い商品として企画された可能性が高いと考えられる。⁽¹²⁾

金水が『孫子』という兵法書を扱う際にも、読本や合巻において軍記物語を絵入本化する方法をそのまま利用している。それは、近世全体を通じて多くの作者に利用され、受け継がれてきた手法を忠実に継承していると言える。金水の創作活動も、既存の需要と出版慣行を踏まえた、合理的な商業的判断によるものと考えるのが妥当であろう。

おわりに

本稿では、『絵本孫子童観抄』の出版を取り巻く作者の絵入本制作状況を整理した。従来、思想史における『孫子』受容の側面か

らのみ考察されてきた本作品は、近世出版史の中において、決して異質な存在ではなかった。それは筆耕出身の作者松亭金水後期による大本型通俗注釈絵入本の一つである。難解な先行作品に挿絵を加えて平易に説明する方法は、先行する多くの合巻、読本にも使用されてきたものである。商品としての絵入本を量産する常套的な手段であった。

残される疑問として、なぜそれまで積極的に図像化されてこなかった『孫子』を、この時期に松亭金水による絵入本の形で世に出されたのだろうか。平田昌司は、十九世紀に入ってから、イギリスやロシアの軍艦の来航、さらにはアヘン戦争を背景として、対外戦争への危機意識が高まり、兵学、とりわけ『孫子』への関心が急速に高まったことを指摘している。幕末期に『孫子』の版本が急増する事実も、こうした時代状況を反映したものといえるだろう。

松亭金水は、書肆の要求に応じて、古典を絵本化した作品を多数編集した作者である。彼による作品の多くは、従来の抄録絵本の流れに乗ったもので、文学作品として、あるいは古典注釈としての新規性は、必ずしも高いとは言えない。しかし一方で、面白さや分かりやすさといった点への配慮がなされ、読者を強く意識した編集が行われていること、さらに時代の流行や社会的関心に応じて、従来あまり絵入本化されてこなかった古典——とりわけ『孫子』——を新たに取り入れた点は、一定の評価に値するものと考えられるだろう。

結論として、『絵本孫子』は兵学理論の専門的な注釈を主眼としたものではなく、幕末の社会状況が生み出した兵学への大衆的関心」という市場ニーズに対し、板元の出版の慣習と作者金水が長年培ってきた絵入本製作の技術をもつて応えた商業的成果であると位置付けられる。このように、中国の兵書が娯楽的な読み物へと再構成される過程を明らかにすることこそが、近世後期の思想史と出版文化における本作の意義を捉え直す一助となると考える。

【附表二】『絵本孫子童観抄』挿絵一覽

- 卷一 1、孫武子肖像 2、(孫武)齊人ナリ以兵法ヲ一見ニ呉王闔廬ニ 3、長篠合戦甲州方山縣三郎兵衛鳥銃に中り戦死の図 4、武田晴信雪夜に乗じて海野口の城を陥る 5、三浦平六以下(七騎)先登せんと夜にまぎれ重忠が陣前に奔る 6、尊氏兄弟水陸より攻登る新田楠これを防ぐ
- 卷二 1、民の堺論官吏分間の図 2、保元の戦ひ為朝弓勢敵を射しらます 3、楠の奇計東軍の棧を焼落す 4、義貞稲村が崎に海神を祈り干渴とす
- 卷三 1、足利三代義満公花亭に從る 2、將軍義昭信長に敵し横の嶋の城に籠る 3、楠正行が兵足利尊氏の館に乱入 4、源平三草山合戦
- 卷四 1、頼義將軍賊の為に敗走七騎になりて落給ふ 2、長尾景虎義の為に兵を出して信玄と対す 3、測込伊賀守直義の命をうけて大塔宮を弑す 4、蒲原の城將北条新三郎義を金

石の重きに比して孤城を守り討死す

卷五 1、民家の狐魅儒家の頼才 2、結城満朝攻兵を焼討す

3、蟒蛇の猛勢杉の樹を撃折る 4、蜀侯貢りて国を失ふの故事

卷六 1、承久の乱東軍宇治川を渉る 2、畑時能が狗よく敵の

動靜を知る 3、楠正元漂泊の後京師に入りて將軍を狙ふ

4、浅草田圃妖怪の昔語

卷七 1、細川頼之が勢航して四国に趨く 2、神武帝東征ハ

咫鳥郷道をなす 3、賀茂山を隔て直常足利勢をまつ 4、尊

氏戦ひ破れ自殺せんとするの図

卷八 1、高の師泰普三品の塚を発く 2、陶全姜逆威を逞

して忠臣の諫を拒む 3、氏真驕奢に長じ国政をかへりみず

卷九 1、宇治川合戦浄明一來の両法師勇猛萬衆を驚す

2、競が妙計平の宗盛を羞辱す 3、八幡公飛雁を見て伏兵の在

所を知る 4、下野守義朝強て昇殿の図

卷十 1、瓜生保天野宇都宮の物語を立聞するの図 2、大坂

合戦若江堤をいて木村重成討死 3、島津家琉球を攻る

4、長久手合戦信輝長可戦死す

卷十一上 1、山崎合戦明智方敗走 2、吹笛峠にて新田足利

両家対陣 3、賤嶽合戦加藤清正等の七将勇を奮ふ 4、官

軍尊氏を攻んとして白鳥の前を過る

卷十一下 1、千手琵琶を弾く重衡の幽囚をなぐさむ 2、関原

御陣金吾中納言裏切大谷吉隆陣歿の図 3、氏康里見勢を鴻台

に破り正木大膳を討取

卷十二 1、赤壁合戦周瑜曹操の軍を焼討す 2、大阪冬御

陣に真田幸村勇を奮ふ 3、朝比奈義秀力をきわめて幕府の北

門を推破る 4、秀吉の大軍水陸二手に分れ九州を征伐す

卷十三 1、北條早雲賊子を誅して豆州を平吞す 2、松田憲秀

叛謀露顯の図 3、正成奇計を以て赤坂城を攻落す 4、国性爺

大に清軍を破つて鎮江を回復す

【附表二 松亭金水作品一覽（人情本、艶本を除く）

成立年 ⁽¹⁶⁾	書名	書型
天保二年	二十四孝稚教訓	中本
天保三年	時話今校野駒	中本
天保四年	菅原流梅の花形	中本
天保四年	春遊霞彩色	中本
天保五年	新田柱石伝	半紙本
天保六年	太平楽皇国性質	大本
天保七年	怪談花吹雪	中本
天保七・十六年	絵本平家物語	中本
天保一〇年	仇競花夕栄	中本
天保十一・安政四年	嫩髻蛇物語（二、三編）	半紙本
天保一四年	江戸方角墨注抄	中本
天保一四年	教訓御伽草紙	中本
天保一五年	其昔忍振摺	中本
弘化二年	俳諧糸衣	横本

成立年	書名	書型
弘化三年	江都近郊名勝一覽	横本
弘化三年	絵本大將揃	中本
弘化三年	御年玉笑ふ門袞	中本
弘化三年	金のわらじ	中本
弘化三年	一休蟋川狂歌問答	中本
弘化三年か	甲越武者評判記	中本
弘化四年	金竜山浅草寺正観世音御縁起	中本
弘化四年	早引文字通	中本
弘化四年	北条泰時明断録	半紙本
弘化四―嘉永四年	国字水滸伝(十八―二〇編)	中本
弘化五年	勸善浮世車	中本
弘化五年	俠客銘々伝	中本
弘化五―嘉永三年	昔語小栗実説	中本
嘉永元年	和漢年代重宝記	横本
嘉永二年	足利絹手染紫(一六―二一編)	中本
嘉永二―万延元年	善知安方忠義伝(一、三編)	半紙本
嘉永三年	松亭漫筆	大本
嘉永三年	平将門退治図会	半紙本
嘉永三―嘉永五年	鶯墳梅赤本	中本
嘉永三―慶応三年	絵本江戸土産	中本
嘉永四年	本朝歳時考	中本
嘉永四年	本朝武芸百人一首	中本
嘉永四年	夢合重寿宝	中本

成立年	書名	書型
嘉永四年	頼光朝臣勲功図会	大本
嘉永五―安政二年	忠勇阿佐倉日記	半紙本
嘉永五年	天満宮御伝実記	中本
嘉永五年	英雄幼百員	中本
嘉永六―安政四年	高木廻実伝	半紙本
嘉永六―文久元年	袖鑑万物蔵	中本
安政元―四年	大川仁政録	半紙本
安政二―五年	朝夷巡島記(七、八編)	半紙本
安政二―文久元年	足利絹手染紫(一六―二二編)	中本
安政四年	本百将伝一夕話	大本
安政五年	積翠閑話	大本
安政五年	日蓮上人一代図会	大本
安政六―文久元年	忠臣銘々画伝	半紙本
文久元年	能狂百図二編	半紙本
文久二年	観音経略図解	半紙本
慶応元年	絵本孫子童観抄	大本
刊年不明	善悪因果経和談図会	大本
刊年不明	二十四孝稚講釋	中本
書写年不明	松亭反故囊	大本

- (1) 日本近世における『孫子』の受容に言及した主な先行研究は、佐藤堅司「孫子の思想史的研究―主として日本の立場から―」（風聞書房、一九六二年）、平田昌司「孫子 解答のない兵法」（岩波書店、二〇〇九年）、徐静波「浅述日本人对『孙子兵法』的解读和评价」（『孙子兵法研究』二〇二二年第二号）、王洪铭「『孙子兵法』与幕末日本对兵学焦虑的回应―以佐久间象山和吉田松阴为中心」（『日本文論』二〇二四年第一号）、楊立影「经典与制度之间…日本江戸时代『孙子兵法』诠释中的军政思想」（『孙子兵法研究』二〇二六年第一号）などが挙げられる。
- (2) 平田昌司は「現代の日本で出版された『孫子』の解説書は多数あるが、大半は経営・ゲームなどへの応用を説いている。もともと軍事の専門家向けの本だった『孫子』がこのような『読み物』化をおこしたのは、どうやら幕末期かららしい。その代表例が、中村経年（一七九七―一八六二）、筆名松亭金水という読本作家が慶応元年（一八六五）に出した『絵本孫子童観抄』である。」と指摘した。
- (3) 引用本文に句読点がない場合は、筆者が適宜補った。異体字などは通行の字体に改めた。
- (4) 『絵本孫子童観抄』の挿絵や本文は国文学研究資料館所蔵本（請求記号…ナ4・242・11・14、国書データベースにて閲覧）による。本文の翻刻は筆者による。
- (5) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八四年）「松亭金水」項目（武藤元昭執筆）
- (6) 高木元「江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―」（ベリかん社、一九九五年）
- (7) 小林真由美「『善悪因果経』管見―『東大寺諷誦文稿』『日本霊異記』『平家物語』など―」（『成城国文学』三四、二〇一八年三月）では、近世の出版界で積極的に『善悪因果経』を商品として製作し

ている理由として、それは「通俗的な興味を刺激する内容でありながら、『経』としての体裁を備えている」からだと言った。

- (8) 筆耕出身で量産型の作者にとって、効率的な方法とも言える。拙稿「橋本徳瓶作合巻の素材と方法―山東京伝・京山の影響を中心に―」（『日本文学』七四（二）、二〇二五年二月）を参照。

- (9) 高木元「江戸読本に見る造本意識」（『アジア遊学』第一〇九号、二〇〇八年四月）

- (10) 横山邦治「後期読本群の一分野『図会もの』について」（『国文学攷』二二、一九五九年三月）、「図会もの」再説―「頼光朝臣勲功図会」など―（『国文学攷』五二、一九七〇年三月）

- (11) 国立公文書館内閣文庫蔵弘化三年版、請求記号…171・0005注10を参照。

- (13) 初編の序文から、本書が作られた経緯を確認できる。

祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす、と信濃の前司が筆のすさび、現にや平家の世の榮へ、古来今往将にこれ、和漢に例稀なるべし、この盛衰を編りたる、書はもて世間に多かれど、或は清盛一世を記し、或は頼朝義経等、みなその一代々々を、綴りてこれを代記と号く、今また書肆が需に應じて、彼行長が編せる、平家物語を翻訳して、もて童蒙の伽となす、然あれ彼書は十一巻文章、最感すべし、此合巻は一部にして、僅に紙頁二十枚なれば、稍漸に編をば統ものから、尚詳に述がたく、取捨する所多しといへども、時代を差へず義理を廃せず、只管本書に原づきて、聊愚意の戯作を交へず、されば草紙の題号をも、そのま、平家物語と、うちつけに喚散すのみ

従来の作品が清盛や頼朝・義経など、一代記的に構成されてきたのに対し、本書は書肆の需要に応じて、平家物語を分かりやすくし、「童蒙の伽」とすることを目的として編まれたものであると説明さ

れている。また、原典が十二巻に及ぶ大部であるのに対し、本作は紙数の限られた台巻であるため、取捨選択を行いながらも、「時代を差へず義理を廃せず」、原書に基づいて構成したことが強調されている。草双紙でありながら、題号をあえて「平家物語」とした点も、その姿勢を示すものといえるだろう。

(14) 同様な事例は、金水が手掛けた『水滸伝』の翻案草双紙にも見られる。弘化四年刊『国字水滸伝』十八編の序文では、すでに十七編まで刊行されていた本書について、「その嗣編を版元が乞ふこと頻なり」と述べられており、版元からの要請によって続編が編まれたことが明示されている。また、本書が「童蒙稚女に解し易きがため」に、原書を抄録し、草紙として構成されたものである点も、書肆側の企画意図を反映したものと見ることができる。その他、金水による『二十四孝稚講釈』の例も挙げられる。本作は、中国の二十四孝を題材として絵本化した中本で、見返しには「幼童必読一大珍書」と記されている。

(15) 注1を参照。

(16) 国書データベース掲載資料を中心に作成した。刊年が明確な作品は刊年により、その他は序の年などを取った。大本の作品には網掛けを施した。

*本稿は、絵入本学会国際学術大会(二〇二四年十二月二十一日、於韓国蔚山大学校)及び大阪大学国語国文学会(二〇二六年一月十日、於大阪大学豊中キャンパス)における口頭発表に基づくものである。発表前後に御教示賜りました諸先生方に深く御礼申し上げます。

なお、本研究はJSPS科研費1924K1566の助成を受けたものである。

(り・しゅんほ 本学大学院博士後期課程・

和歌山工業高等専門学校助教)